

## 1. (1) 国語科 前期課程 第1学年における実践

### 仲間と共に、想像を広げながら繰り返し読む楽しさを味わう子供たち

#### －「はなのみち」の音読を通して、言葉の力を高める－



1年生の子供たちが、入学して初めて出会う物語教材「はなのみち」。この教材文との出会いが、これから始まる楽しい物語読解の幕開けになるようにしたい。想像を広げながら読む楽しさを味わうことができるようにするには。一人で学習するよりも、より豊かに想像を膨らませて読むことのおもしろさを感じることができるようになるには。叙述や挿絵などから根拠をもち、工夫して音読する活動を中心に、仲間と共に学ぼうとする子供たちの姿から探っていく。

#### はじめに

本学級の子供たちは、入学当初から読み聞かせや読書の時間になると、挿絵を楽しみながら絵本の世界に浸っている様子が見られた。また、あいさつや歌のときには、元気よく声を出することができる子供も多い。

音読の学習が始まると、一人で読んだり数人で読んだり学級全体で読んだり、いろいろな音読を楽しんでする姿が見られた。音読カードを用いた家庭学習では、今まで習った教材を毎日のように進んで音読したり、宿題になっている回数何倍も練習したりしてくるなど、意欲的な子供もたくさん見られるようになった。

そんな子供たちが、入学して初めて出会う物語教材である「はなのみち」。この教材文を音読を中心に学習していくことで、想像を膨らませて読むことの楽しさを感じることができるようになりたいと考え、本実践に取り組んだ。

## 1 学びの構想

### (1) 音読を中心に読みや表現を深める

本教材「はなのみち」は、物語の中に描かれていない部分を想像を膨らませて読むことができ、最後まで読んだ子供たちが、もう一度読みたいという思いを掻き立てられるような話である。

学習指導要領の「読むこと」については、指導事項には「場面の様子や登場人物の行動など、内容の大体を捉えること」、言語活動例には「読み聞かせを聞いたり物語などを読んだりして、内容

や感想を伝え合ったり演じたりする活動」が挙げられている。また「言葉の特徴や使い方に関する事項」では、「語のまとまりや言葉の響きなどに気を付けて音読すること」とあり、次のように書かれている。「音読には、自分が理解しているかどうかを確かめる働きや自分が理解したことを表出する働きなどがある。このため、声に出して読むことは、響きやリズムを感じながら言葉のもつ意味を捉えることに役立つ。また、音読により自分が理解したことを表出することは、他の児童の理解を助けることにもつながる。」

これらの学習指導要領の趣旨を受け、「はなのみち」の物語教材について、言語活動として音読発表会を設定し、登場人物の行動を中心に想像を広げながら読むことにした。「どうしてそのように工夫して読みたいのか」という根拠を明確にしながら、どの叙述をどのように音読するかを考える活動を通して、登場人物の行動や気持ち、場面設定を読み取っていくことができるようにしたい。また、この時期の子供たちの、動作をすることで言葉の意味を理解したり、行動から人物の気持ちを考えたりすることが容易になるという特性から、登場人物の行動から気持ちを考えたり、音読の工夫をしたりする際には、動作化を積極的に取り入れるようにしていきたいと考えた。

教材文のもつ特色を生かしながら、挿絵を見たり登場人物になりきって音読したりすることを通して、物語の世界へ入り込み、想像を広げなが

ら読む楽しさを子供たちに十分味わわせたい。

## (2) より豊かに想像を膨らますためのグループ活動と省察

この時期の子供たちは、話し合い活動において、まだまだ教師と自分という意識が強い。しかし入学当初よりペアやグループ活動を通して、協働するための基礎を養うことを意識してきた。

国語科、特に物語教材の学習では、子供たちが多様な意見に触れることで、一人で考えるよりも、一層豊かに想像を膨らませながら物語の世界を味わうことができるようにしたいと考えた。

「はなのみち」では、自分が決めた音読の工夫を聞き合ったり、考えたせりふを入れながらグループで音読発表したりする活動を取り入れた。場面ごとに音読の工夫を考える活動では、学級全体で、登場人物の行動や場面の様子、挿絵など工夫の根拠となる視点を共有した上で工夫を考えるようにし、段階的に指導していくことにした。また、子供たちの発達段階を考慮し、グループ同士の比較は教師がファシリテートするようにしたいと考えた。子供たちが同じところや違うところなどに気付き、そのよさを認め合うことができるようにすると共に、自分のよさにも気付くことができるようにすることを目指した。

また、グループ活動では毎時間振り返りカードを活用し、めあてを意識して練習を行うことができるようにしていきたいと考えた。振り返りから課題を見つけ、次時の活動につなげていくことを目指した。時には、誰かの振り返りを取り上げて全体に示したり投げかけたりして、よさを広げたり、具体的な手立てをみんなで考えたりするようにし、各グループの段階的なレベルアップにつなげていきたい。また、1年生ということで、不安と迷いもあるが、今回初めて単元全体の振り返りを書くようにしてみたいと考えた。毎時間の振り返りと単元全体の振り返りを用いて、子供たちと本単元の学びを省察していきたい。

9年間の学校生活の入り口、子供たちが「みんなと一緒にだと、いろいろなことが考えられる」「友達の考えや音読を聞くのは、楽しい」という思いをもてるような実践にしていきたい。

## 2 学びのストーリー

### (1) 2年生の音読発表の動画視聴

音読発表会への意欲を喚起するために、2年生の「ふきのとう」の音読発表の動画を視聴した。子供たちは、みな食い入るように動画を見てい

た。感想を聞くと、以下のような意見が出た。

- ・役割を分担していた。
- ・動きや声がそろっていた。
- ・間違えずに覚えていたのが、すごかった。
- ・顔や表情から、1年生へ向けての気持ちや楽しさが伝わってきた。
- ・お話に合わせて、声の大小や速さ、高さを変えていた。

やはり実物を見るということの効果は絶大である。動作化などを入れて豊かに表現すること、叙述や挿絵の中に根拠をもって工夫すること、相手意識をもって発表することなどに、子供たちは気付くことができた。これら全てを学習の中で、子供たちから引き出すことは、難しかったであろうし、教師から子供たちに示したとしても、今回の動画から子供たちが受け取ったような理解には、至らなかったのではないかと思う。

### (2) 題名読み (第1時)

子供たちは、本教材で初めて物語文と出会い、登場人物の行動や場面の様子を想像しながら、話の筋を捉えるという経験をする。そこで、今まで読み聞かせを聞いたり自分で絵本をめくったりして多くの物語に触れてきた経験を生かしながら、この出会いが、楽しい物語読解の幕開けとなるようにしたいと考えた。想像して読むことのおもしろさを感じることができるよう、第1時は題名である「はなのみち」という言葉から、どのようなお話を想像して話し合うことにした。

T: 「はなのみち」の5文字だけを見て、このお話は、どんなお話か考えてみましょう。

しゅんや: お花が好きな人が出てくると思います。

そうま: ちょうちょやハチが出てくると思います。

T: どうしてそう思ったの?

そうま: 「はな」という言葉が出てきたから。

なこ: ちょうちょが、歩いていくお話だと思います。

たき(つぶやき): ちょうちょもお花が好きだからだ!

C: くまさんが、動物に種を分けてあげると思います。

なこ: りすさんが、くまさんに分けてあげると思います。

しの: くまさんが、お友達のためにお花を育てて、お友達がびっくりするというお話だと思います。



写真1 第1時の板書

「はな」という言葉から、そうまは、花に関係する「ちょうちょ」や「ハチ」を思い浮かべたのであろう。また、なこは、そうまの発言とその前のしゅんやの発言とをつなげている。たきのつぶやきからも、しゅんややなこの発言を基に想像を広げて考えている様子が見て取れる。

「くま」や「たね」といったキーワードは、話を先に読んでしまった子供から出てきた言葉であったのかもしれない。しかし、そのようなキーワードからなこは「りすさんが、くまさんに種を分けてあげる話」とそれらを上手につなげ、主語と述語の関係にして、発表していた。その後のしのの発言からは、なこの言葉を基に、さらに想像を膨らませている様子が伺える。(写真1)

「はなのみち」という5文字から、様々なことを想像し、友達の発言からさらに想像を広げ、自らの言葉で語る子供たちは、とても楽しそうであった。「どんなお話だろう」というこれからの学習に対する意欲の高まりも感じられた。範読すると、思っていた話と似ていた部分や、考えもなかった登場人物などに思いを寄せて、それぞれが感想を述べていた。子供たちと教材文との出会いは、よいものとなったように感じられた。

子供たちに「はなのみち」でどんなことを学習したいか尋ねてみた。1年生の最初で、どのような発言が出るか、または全く発言が出ないのではないかという心配はあったが、今回思い切って投げかけてみることにした。

T: はなのみちで、どんなことを勉強したいですか。

しの: 文字を書きたいです。

T: お話に出てくる文字を書きたいんだね。

なこ: どうしてこのお話を作ったか知りたい。

T: このお話を作った人は、分からないね。せめて、どうしてお話に出てくるくまさんや動物さんが、こんなことをしたのかっていうことは、みんなで考えると分かりそうだよ。そのお勉強をしようか？

なこ: うん。

にな: 2年生みたいに、劇がやりたいです。

たき(つぶやき): 誰に見せるの？

T: 誰に見せたい？

C(口々に): 2年生! 6年生! 1組の人! 先生!

お父さんやお母さん! 幼稚園の子!

1年生がここまで語れるということに正直驚いた。特になこは、作品を外側から捉え、作者という視点から発言している。

私自身が初めての経験であったが、たきの発言により、相手意識をもって音読発表会に臨もうとする雰囲気ができた。子供たちのやる気もより一層高まっているようであった。教師側が「1年生だから…」と決めつけてしまうのではなく、幼稚園での経験や学びを信じて、投げかけたり任せたりすることで、子供たちは、自分たちの力で大切なことに気付いていくことができるのだと実感することができた。

「字(本文)を書きたい」「2年生さんのような劇をしたい」という子供たちの考えを基に、本単元のゴールを「お話に合った音読劇をしよう」と設定し、そのために、キーワードと挿絵を使った「お話絵本」を作ることにした。子供たちは大変前向きな様子であった。

### (3) 場面の様子や登場人物について

#### 想像を広げながら読む(第2~5時)

第2時からは、場面ごとに登場人物の行動や気持ちを読み取って「おはなし絵本」を作成し、音読の工夫を考えた。初めての活動なので、工夫する箇所は、会話文を中心に絞った。

1の場面では、くまさんが袋を見つけ「おや、なにかな。」と言っているときの気持ちを読み取り、音読の工夫を考えた。理解を深めるため、教室の戸棚や給食袋などの具体物を使って動作化してから、くまさんの気持ちを考えた。

少し前に「あさのおひさま」という詩を音読したとき、子供たちは、楽しそうに動作を取り入れていた。また、「(おひさまが) のっこり うみから おきだした」や「(かおを) ざぶんと うみで あらったよ」という部分を「『のっこり』は、ゆっくりということだと思うから、ゆっくり読もう」とか「『ざぶんと』は、大きなおひさまが海の波で顔を洗うから、大きく読もう」と、本文から根拠を挙げ、工夫して音読していた。今回音読の工夫を考える際には、その時の経験や、2



しかし、悔やまれたのは「ながいながい」と繰り返される言葉に着目した音読の工夫を考える時間が無くなってしまったことだ。繰り返す言葉を読むことは、「おむすびころりん」や「おおきなかぶ」の学習へとつながっていく。そのため、しっかり押さえておきたいと思っていたが、先の話し合いに時間を費やしてしまい「この繰り返しの言葉は強調であり、意味を強めるような工夫をするとよい」とこちらから伝えるだけになってしまった。

子供たちは、話の内容を読み取るため、せりふを加えながら「お話絵本」を作る活動楽しんで取り組んでいた。この頃になると、友達がどのように書いているのかということに興味をもち、休み時間に読み比べているような子供も見られた。

#### (4) 音読発表会を開く (第6～10時)

第6時からは、音読発表会に向けて準備が始まった。「授業中に工夫を考えた所を中心に、さらに追加してもよい」と、「一人一役担当し、ナレーター以外の動物の子は、自分で考えたせりふを加える」ことの2つの条件を示してから活動した。

まず役割分担をし、各自工夫やせりふを考えた。分担は、主人公の「くまさん」1名、それ以外の動物1名、ナレーター1 or 2名で、グループで相談して決めた。譲り合ったりじゃんけんをしたりして、すぐに決められているグループもあったが、りかのグループは、なかなか決められずにいた。教師が入り、じゃんけんで決めようということになった。動物の役を希望していたりかは、負けてナレーターになった。本人を諭し励ましたがなかなか切り替えができない様子で、涙が止まらず、その後の活動は、ほぼできずに終わってしまった。

その日の放課後、りかの母親に電話連絡をし、切り替えができるよう力を貸してほしいと伝えた。しかし、次の日の連絡帳には「まだなかなか立ち直れないようですが、よろしくお願います」とメッセージが書かれていた。

第7時は、ほとんどのグループが練習に入った。敢えてりかには声をかけず見守っていると、同じくナレーターを担当するいつきと2人で、どこを読むかを決め始めた。読む箇所が決まり、自分の担当する部分の工夫を教科書に書き終

えたりかは、「もう終わったよ」と自分から報告に来てくれた。

やるべきことが明確であること、一人一役という責任があること、一緒に活動する仲間がいることなどが、りかの気持ちを切り替えさせたのではないかと考える。初めての活動への不安もあったのかもしれない。しかし、活動を終え報告にきたりかの表情には、やり遂げた満足感と、発表会への意欲の高まりが見て取れた。

読み方を決めた後、りかはグループの友達と楽しそうに練習していた。どのグループよりも早く、相手意識をもち、並び方をどのようにするとよいか話をしていった。そこで、途中で全体を集め、その様子を取り上げた。よさが広がると同時に、りかが少しでも自信をもって発表会に臨んでくれればと思った。

なお、ちさ、りょう、りんのグループは、協力し順調に練習を重ねていた。周囲の状況を判断して行動することや、コミュニケーションを取ることが苦手なおに対して、他の3人が親切で丁寧な関わりをもちながら進めているようであった。そこにりんの、動きやせりふなどの豊かなアイデアが加わって、見ごたえのある発表になっていった。こちらも、他のグループのよいモデルになると判断して、全体に紹介した。

練習は、ただ繰り返し読むだけではない。工夫として加えた読み方やせりふ、動きの確認はもちろん、並び方や目線、あいさつなど、いろいろなことを組み込んでいかなければならない。

しかし実際は、向かい合って繰り返し読んでいただけのようなグループも見られた。

練習の最初に、気を付けるべき点の全てを示し、指導しても、情報量が多すぎて子供たちが理解するのは難しい。時間はかかるが、練習中、グループに指導に入る中で、そのよさを取り上げて全体に広めていく方が、子供たちの理解は深まると考えた。実際、りかたちやなおたちの練習の様子を紹介した後、並び方を変えたり動きをさらに加えたりして練習するグループがたくさん見られた。りかたちのグループは、りかが前に立ち、アドバイスしながら練習する姿も見られた。

子供たちは、仲間の姿をモデルにして学び、自分たちの学びに生かそうとする。教師が全てを示してしまうよりも、その方が、子供たちの意欲も高まり、効果も高いのである。

アドバイスの内容まで見取ることができなか

ったが、りかが前向きに取り組んでいることが非常に嬉しかった。とはいえ35人、9グループの練習を一人で指導して回るのは、非常に難しい。3年前、同じように「はなのみち」の音読発表をした際は、7～8人のグループ構成で行った。しかし、1年生がそれだけの多人数で活動するのは、無理があった。その時の反省を生かして、今回は生活班でのグループ音読にしたのだが、全てのグループに対して十分な指導ができたとは言えない。限られた時間の中で、効果的な指導と見取りを行うためには、工夫が必要である。その一助となるよう、今回、1時間ごとの振り返りカードを使うことにした。

構想段階では、「様子や気持ちを想像すること」つまり、根拠をしっかりとつことと、それを基に「具体的な工夫を考えること」を大切にしたいと考えていた。そこで、観点を「様子や気持ちを考えることができたか」「工夫して音読できたか」の二つにした。しかし、実際の音読発表の練習が始まってみると、活動と振り返りの観点が合っていないことが分かった。そこで、途中からは、「なりきって（工夫して）音読することができたか」と「グループで協力して活動することができたか」に変えた。（写真3、4）

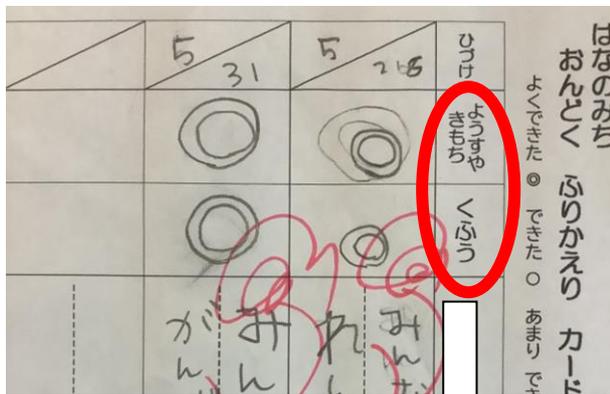


写真3 最初に使っていた振り返りカード

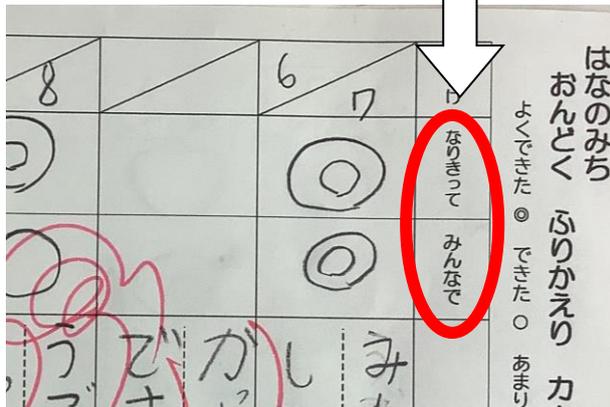


写真4 観点を変えた振り返りカード

予め次の時間が発表であると伝えてあったのだが、第7時の終わりに子供たちから、もっと練習したいと申し出があった。確かにまだ、不十分さが見られるグループはたくさんあった。そこで「何がうまくいなくて、時間が欲しいの？」と子供たちに投げかけてみた。すると「覚えている人とそうでない人がいて、本を見ないままできない」「動きがうまく決まらない」という意見が出た。前者については子供たちから、「自信がない人は教科書を開いて、できるだけ見ないで言えいい」という意見が出た。後者については、1人で考えるのではなく、同じグループの友達と一緒に考える」という意見が出た。当初計画していた時数を上回っており迷いもあったが、物語の学習の入り口である本単元の学習で、子供たちが満足感を得ることは、今後につながる大切な事なことであると見え、あと1時間、練習時間を確保することにした。

第8時。予定外の練習になったが、その分有意義で、発表への意欲が高まる時間にしたと考え、何をめあてにしたいかを最初に話し合った。

T: みんながもっと練習したいと言ってくれたので、時間を作ったけれど、何をめあてに練習するの？  
とうや: ぼくは、動きを忘れることがあるから、もっと練習したい。

たき: ぼくは、声の工夫があまりできなかったから、もっと伝わるようにしたい。

T: それぞれ、めあてをもってするといいね。どのような工夫も「お話に合う」ものになるように、練習しましょう。

話し合いの後、練習が順調に進み、いつ発表してもよいという状態にまで仕上がりがつつあった、なお、りょう、ちさ、りんのグループの音読を、途中まで、もう一度みんなで見た。

なおたちのグループは、登場人物が会話しているように、相手の方を見ながらふりを付けるということを唯一やっていた。（写真5）他のグループの子供たちは、自分たちにはなかった工夫をしていることに気付いたようで、練習に入ると、まず、めあてを確認し、なおたちのグループの発表を生かして、工夫を加えようと活発に意見交換し、練習していた。



写真5 なおたちのグループの発表の様子

りかたちのグループも、前時のようなミニ先生方式の練習を重ね、いつでも本番が迎えられるという状態になっていた。最後の練習のりかの振り返りは以下である。

「みんなでいっしょに、ぜんぶはつけられなかったけれど、うごきをつけられたから、うれしかったです」

泣きながらスタートしたりかが、グループの仲間と学ぶ楽しさを感じながら、発表会を迎えられることを嬉しく思った。

第9時の発表会。子供たちは緊張している様子であった。最初、に発表する側と聞く側のめあてを確認した。いざ始まると、止まってしまったり声が小さくなってしまったりする子供もいたが、見ている子供たちからは「がんばれ」「もう一回言えばいいよ」といった温かな言葉と拍手が起こり、よい雰囲気での発表会となった。発表後に書いた、りかのグループの振り返りは以下である。

- ・みんなが えがおで みてくれたり しずかにしてくれて うれしかったです。もっといっぱい おんどくはっぴょうかいを したいです。 みはるくんの くまさんのせりふが すごく じょうずでした。(さちこ)
- ・はっぴょうかいで ちょっと はずかしかったけど たのしかったです。になちゃんの こえが おおきかったから すごかったです。(けいた)
- ・ぜんぶ すごかったです。もっと やりたいです。きょうりよくできて うれしかったです。きんちょうしたけど せいこうして とってもたのしかったです。(りか)

発表会のグループ練習を始めた頃は、教科書をただひたすら繰り返し音読するだけのグループも見られた。しかし、回を重ねるうち、友達の読

み方について、人物の気持ちや様子を基に工夫しているところを褒めたり、アドバイスしたりする姿も見られるようになっていった。発表会後の感想では、他のグループのよい所を見つけて書いている子供もいた。学校という場で、仲間と共に学ぶよさを感じることができる機会の一つになったのではないかと考える。

りんのグループには高機能自閉症であるいつきがいる。いつきは、初めてのことには不安が大きく、見通しのもてないことに取り組むには、支援が要る。4月当初は「できない」と様々な活動に尻込みしてしまうことも多かった。今回りかと同じグループで、同じナレーターを担当した。りかが涙を流したこと、いつきがペアでいたことで、私自身このグループに支援に入ることが多かった。いつきは、決められたことはやろうとする真面目な性格である。分担を決めたり一緒に練習したりする際、「やらなくては」という思いからか、自分からりかに声をかけている姿を何度も見ることができた。発表会後のいつきの振り返りは、以下の通りである。

- ・みんなで おんどくをやって ちょうぜつ たのしかったです。みんなであわせて たのしかったです。きょうかしよを みないで できました。おおいこえでいえて たのしかったです。(いつき)

個人面談の際、「お友達はできた？」と聞いても「友達は分からない」と応えていたいつき。しかし振り返りには、「みんなで」という言葉が並んだ。コミュニケーションを取ることが苦手な子供でも、学習や具体的な活動を通して、いろいろな他者につながる機会を得ることができる。そして、そのつながりによって、協働することのよさを感じたり、満足感や達成感を得たりすることができる。事実、この頃からいつきが、不器用ながら、他の子供たちに自分から関わろうとしている姿を見ることが増えた。子供たちが自分たちの手で作り上げていく音読発表会は、特性をもった子供でも、仲間と共に学ぶ喜びを感じることができ得る言語活動なのではないだろうか。

今回、研究副題にかかわって「省察」の意味についていろいろ考えてきた。その一つが前述の振り返りカードである。一時間ごとの振り返りを書くようにしたことで、それぞれのグループの進捗状況や何に困っているのかを把握することがで

きた。

今回は、1年生、しかも初めての物語単元で、どれだけの時間を振り返って文章にまとめることができるのか不安もあったが、「単元の振り返り」も書いてみることにした。

書かれたものを見ると、「発表会が楽しかった」「お話絵本を書いたことが楽しかった」「またやりたい」といった、単元の中で印象に残った場面や楽しかったことを切り取ったものが多かった。1年生としては十分な振り返りだと思った。しかし、何人かの子供たちは、以下のような振り返りを書いた。

- ・ようちえんの はっぴょうよりも じょうずになったと おもいます。もっと おんどく したいです。せりふを かいたのが たのしかったです。2ねんせいになったら 1ねんせいよりも じょうずになりたいです。(さちこ)
- ・だいまいよみは むずかしかったけれど たのしかったです。おはなしえほんは えをかくのが たのしかったです。2ねんせいの ふきのとうの おんどくが すごくじょうずでした。せりふをかいたときは、ながくて むずかしかったけど、おんどくは たのしかったです。おんどくはっぴょうかいは、きんちょうしたけど、やってみたら たのしかったです。つぎはもたのしく おんどくはっぴょうかいは やりたいです。(りん)
- ・さいしょ よんでみたとき よくわからなかったことが よくわかりました。2ねんせいのおんどくをみて よくわかったことがうれしかったです。はっぴょうかいにむけて いっぱいせりふをかんがえたことは、たのしかったです。みんなで ちからをあわせて よめたのがうれしかったです。(なこ)
- ・ようちえんのときよりも こくごが すきになってきました。おんどくのしゅくだいが すきになってきました。だから、つぎのしゅくだいも もっとだしてほしいなと おもいました。(ちか)

多少順序が違っているものもあるが、単元の学びをストーリーとして捉えているように感じる。幼稚園での経験、2年生の音読発表を見たこと、自分たちの「はなのみち」の学び、そして今後へとつながっていく様子が見て取れる。全員ではないにせよ、このような振り返りが書けるということに非常に驚かされた。

子供たちは幼稚園での劇などや読み聞かせ、本

の世界に親しんできた様々な経験を生かして、実に豊かに想像を広げ、表現に工夫を加えて音読発表を行うことができた。初めてのことに意欲的な時期でもあり、発表会自体が新鮮で楽しいものになったことが、活動の様子や子供たちの振り返りからも伝わってきた。

### 3 省察

#### (1) 音読を中心に読みや表現を深める

4月から音読を中心に物語を楽しんで読むことに継続して取り組んできたこと、また、根拠をしっかりと挙げながら音読の工夫を考えるようにしてきたことによって、本学級の子供たちは、音読する楽しさを感じたり、物語に書かれている本文や挿絵を丁寧に読みとったりすることができるようになってきたと思う。中には物語を俯瞰的にとらえ、作者の意図にまで思いをめぐらせている子供がいたことには、大変驚かされた。

お家の方の協力もあり、「はなのみち」の学習が始まり、音読発表会という言語活動を設定してから、毎日、宿題にしている回数以上に音読の家庭学習に取り組む子供も増えた。

音読を中心とした読むことの学習によって、「物語を読むのは楽しい」「想像がどんどん膨らんでいくのは面白い」という思いを膨らませることができたのではないかと思う。

しかし、1年生とはいえ「なりきる」ことに羞恥心があるように見受けられる子供もいる。十分な練習期間がなく、自信をもって発表できなかったのかもしれない。他のグループと見合うなどの機会が少なく、よいものになったという達成感が薄かったのかもしれない。今思えば様々なことが原因だったのでと考えられる。それらをきちんと見取り、適切な指導や支援を行えなかったことは、反省すべき点である。

低学年の今だからこそできる、ダイナミックで思い切りのよい音読を通して、子供たち一人一人がその楽しさや物語のよさを十分に味わうことができるようにしていきたい。

#### (2) より豊かに想像を膨らますためのグループ活動と省察

子供たちの活動の様子を見ていて、自分なりの根拠により考えた工夫を、友達と合わせて一つの発表にまとめていくことは、難しかったように見えた。しかし振り返りには、友達のよさについて書かれているものがたくさんあった。グループの

友達や他のグループのよさに気づき、よさを認めている姿に感心させられた。

1年生の割に落ち着いている本学級の子供たち。毎時間の振り返りには、安易に◎を付けず、うまくいかないときには正直に△をつけていた。だからこそ、振り返りカードの観点は初めの段階で吟味しておかなければならなかった。修正を加えたことで効果があったと感じる部分はあるが、もっと長いスパンでの子供たちの学びや思考の流れを見取ることができたかもしれないと悔やまれる。

最後の発表会後の振り返りには「おはなしにあわせておんどくできた」という項目に、35人中32人が◎、3人が○をつけた。「おもとだちときょうりょくしておんどくできた」には、31人が◎をつけ、1人が○、1人が△を付けていた。

多くの子供たちが音読発表会に対して、やりきったという満足感を得ることができたようである。仲間と共に学ぶよさを感じている子供が多かったことも、本実践の成果であると考えられる。

1年生の授業を構想する時には、いつも頭を悩ませる。学習の基本を作る大切な時期、教師側が色々と提示したり指示したりすることは、もちろん必要である。しかし、子供たちが今までの経験を生かしながら、試行錯誤しながらのびのびと学ぶことも大切にしていきたい。1年生を担当させてもらうのは5回目。本校において3回目である。しかしながら、この葛藤は、何度授業をしても消えることがない。活動の流れ、子供たちの動きや思考に、ある程度の見通しや予測が立てられた。しかしながら、逆にそのことが「1年生」という固定観念を強くしていたことにも気付かされた。特に、幼稚園の学びをつなげて書かれた単元全体の振り返りは、私の予想を超えていた。

「1年生だから」ではなく、子供たちの可能性を信じて、少しレベルが高いかな、と思うことにも挑戦させていくこと、教師自身が挑戦する気持ちを忘れず実践していくことが大切であると改めて感じることができた。尻込みする子供には、安心できるように見通しをもたせる手立てを行えばよいし、超えることが困難な子供には、頼もしい仲間とつながる場を用意すればよい。グループで超えられない課題には、全体で話し合う機会を設けたり、教師の指導を入れたりすればよい。いろいろな手立てを講じる準備をしておくこと、そして機を捉えて適切な手立てを行うことで、子供

たちの学びは、時に教師の予想を超えて広がっていく。その可能性に気付かされた10時間であった。

子供たちの振り返りに見られたのは、たくさんの「次の発表会では」という言葉である。多くの子供たちが、次に出会う物語を、また、みんなで音読したいと思っているのではないかと思う。その意欲がずっと続いていくよう、仲間と共に学ぶ喜びを感じ続けることができるよう、子供たちと共に考え、読みが深まる楽しい国語の授業を目指していきたい。

(野阪 友美)